The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



# 国際的視座から見える仏教研究の現状と展望
## ——北米，韓国，中国，欧州，日本——

代表　田中ケネス（武蔵野大学教授）

本パネルでは，北米，韓国，中国，欧州の地域を代表する四名の仏教学者が発表し，後半日本の研究者が加わり，これら四地域と日本の仏教学の状況と展望について議論した．

**発表1「カナダ・アメリカにおける仏教研究の現状と展望」ジェシカ・メイン（ブリティシュ・コロンビア大学講師）**

北米仏教学の歴史は短く，初めての博士課程が設置されたのは六十年代であった．今日，十数の大学で仏教学の専門プログラムが存在するほど成長し，1996–97年の2年間に，北米の大学で76の仏教をテーマとする博士号が出された．これは日本を超える数字であろう．最近出版された『プリンストン仏教辞典』は北米仏教学を象徴するものであり，その特徴として，1）インド仏教を仏教の本質と位置づけないこと，2）モダン仏教を仏教の本質から逸脱したものと捉えないこと，3）軽視されてきた仏教地域や言語を積極的に取り入れていること，そして4）中世・近世仏教も積極的に掲載し歴史的にバランスをとっていることが挙げられる．大学における仏教学の講座は，大学外の団体による寄付やマインドフルネス運動に刺激された科学と仏教学の関わりについての研究等を要因として，今後も現在の勢いを維持するものと思われる．

**発表2「韓国における仏教研究の現状と展望」金天鶴（東国大学校教授）**

近代以降の韓国の仏教研究は日本の仏教研究方法や成果に依るものが多かったが，1910年代の韓国独自な研究以降，1960年代に入ってようやく学問体制が整い始めたと言える．中でも，1962年の東国大学校の仏教文化研究院の設立と1973年の韓国仏教学会の創立が代表的動きだといえる．尚，日本印度学仏教学会で発表される論稿は，2002年ごろ迄は重要なモデルとなっていたが，最近英語での論文発表を推奨する各大学の方針によってその重要性が低下した．近年，仏教研究は思想中心となり文献学の割合が減ったが，それは，近現代仏教の研究がホットになったからである．その中で，国が推進する人文学の世界化を目指す10年プロジェクトに，金剛大学校仏教文化研究所が「仏教古典語・古典文献を通して見た文化の形成と変容及び受容過程研究」，東国大学校が「Glocalityの韓国性——仏教学の文化拡張談論」と題するテーマで参加している．

**発表3「中国における仏教研究の現状と展望」張文良（中国人民大学教授）**

新しい動向としては，以下のことが注目される．1）文献学研究（特に敦煌仏教文献研究）の機運の高まり．2）研究の基礎となる資料整理の作業が進められ，『蔵外文献』，『民国仏教雑誌文献集成』，『中国地方志仏道文献総纂』などの出版．3）宗教社会学の方法を用いて，寺院経済，仏教社会事業，社会参加仏教などを研究



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



する学者の増化．4）仏教制度の研究，仏教と政治との関係に関する研究の進展．5）海外研究に関する紹介の増化．6）人材育成の領域において仏教界と海外との連携の強化．

中国仏教研究には，次のような問題点や今後の課題が存在する．1）中国仏教研究への一極集中．2）宗教専攻の院生たちの語学（特にサンスクリット）の訓練の不足．3）研究の方法論の不確立．4）学術組織の不整備．5）海外の研究成果が中国人の研究に反映されていないこと．6）院生の質の向上．

**発表4「ヨーロッパにおける仏教研究の現状と展望」フレデリック・ジラール（フランス国立大学極東学院教授）**

発表では，欧州全体に渡って各国の仏教研究の状況を幅広く網羅したが，他の3つの地域と比べて文献学の割合が大きいという特徴がある．その点に関する一部を紹介しよう．Collège de France では19世紀初頭から文献学の伝統がある．Paul Demiéville は中国禅宗史を中心として，仏教研究各領域に幅広く大きな刺激を与えた．彼の『臨済録』の訳は傑作で，研究者以外にとっても古代ギリシャの哲学の書物を読むかのように受け入れられている．Jean Filliozat は印度中国仏教の教学・歴史の詳しいガイドとして使える『印度学教科書』を編纂した．André Bareau は，釈迦の伝記の文学的研究および原始仏教の文献学的研究を通じて，釈迦入滅を紀元前350年頃に定めた．このような過去の業績を基に，欧州の各大学が財政的制約に制限されているにも関わらず，フランスの仏教徒が全人口の2%を超えたことが象徴するように欧州全体での仏教への関心の高まりに刺激され，仏教研究は衰えることはないであろう．

**レスポンデント：斎藤明（東京大学教授）**

以上の4つの発表を受け，氏は，それぞれの発表に対する簡単なコメントを述べるとともに，近代日本における仏教研究の特色を描いたうえで，今後の仏教研究に期待されるいくつかのポイントを挙げた．氏によれば，近代日本の仏教研究は，伝統的な漢文教育と宗学研究を基礎に，新たにヨーロッパ由来の近代仏教学が導入・接合される形で成立したという．その上で氏は，今後，日本の仏教研究に期待されるのは，1）国際的な学術交流をより積極的に進める中で，2）各宗派の教理を支える教判（教相判釈）の見直しと相対化を図り，3）現代社会が抱える多くの問題を，学派や宗派，さらには宗教間の壁をもこえて真剣に論じ合い，改善に向けた具体策を一つ一つ提起するとともに，その実現を図ることにあると結んだ．

（発表者の報告が必要な方は，学会名簿を通して田中ケネスへ連絡をお願い致します．）



NII-Electronic Library Service